



図3 耕地整理と旧村落と蔵の分布（住吉・帝塚山周辺拡大図）

間のつじつまは合う。旧村に多いのは、もともと蔵が存在したということも考えられる。あるいはまた、もともとの農家型の蔵が存在したのを見て、移り住んだ人たちが家財道具や家宝の保管のために造ったとも考えられる。さらに新しい郊外住宅地に大きな屋敷が「櫛比した」のを見て旧村落の富裕な村民が負けじと蔵のある屋敷を建てたのかもしれない。

いずれにしても詳細な原因の調査は今後の課題である。

以上仮説ばかりでまとまりを欠いたが、蔵は旧村に多いことを示せた。

#### 参考文献

- ・財団法人大阪都市協会：住吉区史、住吉区制七十周年記念事業実行委員会、1996
- ・財団法人住吉村常盤会：住吉村誌、1927
- ・宮本又次：大阪の風土と歴史、株式会社毎日放送、1973
- ・大阪市：大阪の区画整理の歴史、<http://www.city.osaka.lg.jp/toshiseibi/page/0000022089.html>、2012/02/13 閲覧
- ・栗本智代：大阪再発見 VOL2 ③ちんちん電車に乗って帝塚山へ／CEL 59号、大阪ガスエネルギー・文化研究所
- ・帝塚山の住宅開発：<http://blog.goo.ne.jp/chishima-archive/e/8eef3e6f746e114d06a9b3d8a8ca37b>、2012/02/13 閲覧
- ・Wikipedia：帝塚山、住吉村、北畠、2012/02/13 閲覧

# 蔵所有者に聞く

住吉蔵部／仙入洋・牧野高尚

## 伝統的な蔵を再生する

住吉区内には、今なお100以上の蔵が遺されている。これを多いと考えるか、少ないと考えるか…新たに蔵が建てられる可能性の低さを考えると、現存する蔵を再生・有効利用する意義は大きい。

伝統的な蔵に新たな命を吹き込み、現代によみがえらせたい…そう願う蔵所有者もいる。

住吉区内に現存する蔵分布を調査し、その幾つかを実測調査することにより蔵の価値を再発見し、蔵再生の手助けができればとの思いから、住吉蔵部としての活動を開始した。

蔵所有者のみならず地域住民にとって、地域遺産としての蔵の魅力の再発見につながればと思う。蔵の再評価を通じ、まちの魅力を再発見し、まちづくり活動に繋がればうれしい限りである。

## 地域交流の拠点としての蔵ギャラリー

住吉蔵部として活動を開始して間もなく、蔵を再生し、ギャラリーを運営されているご夫婦の噂を耳にする。「蔵」のギャラリーCLASSIC（以下、蔵ギャラリー）のオーナー夫妻は、我々の突然の訪問を温かく迎え、様々な物語を親切に話してくれた。

蔵ギャラリーは、同じ敷地内の3階建の鉄筋コンクリート造集合住宅に対し、庭を挟んで隣接する形で建つ。既存の蔵を残し、住宅部分を集合住宅に建替えた形で、蔵を借景とした住宅棟を実現したかったとのこと。

閉鎖的な蔵をその用途を変更して地域に開放し、交流の場にするという発想が、地域活性化を促す効果を発揮する。

コンクリート打放しの住宅棟との対比が美しい白漆喰の蔵ギャラリーは、蔵再生を通じたまち活性化の良事例として注目できる。



2階のギャラリー

## 伝統と革新

蔵を特徴づけるのは、重厚な瓦屋根に白漆喰塗りの分厚い壁が定番とも言えるが、その両者を陰影を付けながらつなぎ合わせる線形も注目に値するだろう。いぶし銀の屋根と白い壁が陰影ある線形を介して出会う姿こそ、伝統的蔵の魅力のひとつではないだろうか？

蔵ギャラリーの壁厚は約35cm、厚いところで40cmと分厚く、それに加えて3段構成の線形と本瓦葺きの屋根など、力強い姿を呈している。

蔵という伝統に挿入されたギャラリーという革新。分厚い壁に突き刺さる水廻りや貫通する丸窓が蔵の本来の姿（壁厚や壁下地）を明らかにし、2階床のど真ん中を貫通する吹抜けが、見事な小屋組みの雄姿を1階にまで伝えている。

伝統に革新を挿入することにより、お互いが共鳴し合い、蔵の魅力を増幅しながら、新たに再生する。蔵再生の貴重な成功事例として注目したい。



外観